

水道管の未来について考えた事

会津若松ザベリオ学園小学校

六年 穴澤 沙羅

令和六年一月一日、お正月を家族と過ごしている時に大きなゆれを感じ、すぐにテレビをつけてみると、石川県能登地方の映像が映し出されていきました。次の日には水道、ガス、電気などのライフラインが寸断され、多くの人がひなん所生活を送っている様子がテレビのニュース入や新聞で伝えられていました。私が

生まれる前に起きた東日本大震災の話を出しました。食事を作る水やお風呂、トイレの水が、いや口をひねっても出てこない事が、水だけ大変だったかを家族から聞いていました。

地震から数日後には自衛隊や医師などの医療チームが被災地に派けんされたというニュースを見ました。それからすぐに、私の住む市から、給水車と職員の方が石川県珠洲市へ向けて出発しました。水道管がこわれて

いて水が出ない所へ行き、給水車から袋に水を入れて配ることを続けていたそうです。東日本大震災の経験から、ひなん所などの限られた中での水の使い方や生活の事など役に立つ知識も被災した方へ伝わったと思います。少しづつ水道が復旧し始めたけれども、場所によつては復旧工事が進んでいない所もあると新聞で見ました。古い水道管や、地域の問題などが原因この事でした。そこで、水道管について調べてみることにしました。数十年前

に作られた水道管はさびついていたり、地震に弱かったりするため、各自治体で水道管の取り替え計画が進められています。阪神淡路大震災の経験から、災害に強い耐震型ダクタイル鉄管などの水道管が開発されていたり、設置場所によつてよく曲がるポリエチレン管や強度が高いスチール管が使われ分けられたりしています。水道は高度経済成長期の一九六十年から一九七十年代に急速に普及し、多くが水道管の法定耐用年数である四十年をこえ

ているため、日本各地で取り替えるが必要な事
も知りました。水道管の取り替えには新しい
水道管の費用や、工事をする人達の確保など
の問題があります。そのため、これからの人
口減少や過剰化などに備えて水道管そのもの
をスリム化したり、Aエやデジタル技術をう
まく活用して、浄水場のデータの集計作業
や水道工事でも、正確な情報をスマートフォン
やタブレット端末に入力していることも知
りました。

今回、水道管について調べてみたことで、
様々な経験から学び新しい技術を取り入れるな
がら、私達のライフラインを守っている浄水
場や水道局の方々、困った時にすぐに対応し
てくれる工事の方々への感謝の気持ちを持っ
ることができました。私達が大人になつた時は、
気候変動や環境問題による水不足などで、様々
な困難があるかもしれません。日本中、世界
中の国々と情報を共有し、助け合いながら水
資源を守り続けていく事で、ひとりひとりが

びきる事を進んで実行する事が大切だと感じました。